『源氏物語』宇治大君の死の表現
ー「もののかれゆくやうにて」を中心としてー

咲本　英恵

はじめに

本稿は、『源氏物語』総角巻の女主人公、宇治大君の死の表現について考察するものである。以下に、その大君の臨終場面を引用する。

> 世の中をことさらに厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにものの枯れゆくやうにて[1]、消えはてたまひぬるはいみじきわざかな。ひきとどむべき方なく、足摺もしつべく、人のかたくなしと見むこともおぼえず。限りと見たてまつりたまひて、中の宮の、後れじと思ひまどひたまへるさまもことはりなり。あるにもあらず見えたまふを、例の、さかしき女ばら、今はいとゆゆしきこととひきさけたてまつる。
>
> 中納言の君は、さりとも、いとかかることあらじ、夢かと思して、御殿油を近うかかげて見たてまつりたまふに、隠したまふ顔も、ただ寝たまへるやうにて、変はりたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを、かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかばと思ひまどはる。（『源氏物語』総角・⑤P328 ～ 329、新編古典文学全集本による。以下同）

下線部のように、大君の死は、「ものの枯れゆくやうにて、消えはてたまひぬる」という直喩表現によって描かれた。

この表現について、石田（1961）が、「枯れゆく」は歌語であり、『源氏物語』内には死の直喩表現が4例しかないことに注目し、それが大君の生き様を象徴する表現であると唱えて以来、宿根草にみる復活の心象を利用し浮舟の登場を暗示しようとするものである（湯本（1993））、白居易「婦人苦」における女の愛情の永続性を意味する「枯死」を下敷きにして、大君の薫への愛情を示そうとしたものである（鈴木（2010））、また「枯れゆく」は大君が山の自然や山という異界のなかに生きたひとであるがゆえの比喩表現であり、「モノ」という神的なものが大君自身から去っていくこと、そして大君自身が恋人から離れていくことを掛けるために選び取られた歌語的表現である（咲本（2011））、などのように論じられてきた。

しかし、従来の研究には、次のような問題が残されていると考えられる。

1. 『源氏物語』において、大君の死の表現「枯れゆく」が特異であることは主張されてきたが、どのように、なぜ特異であるかについての考察は十分になされてこなかった。
2. 病床についてから臨終後まで、大君の姿は他の比喩でも表現されている

が、それらの比喩との関連性をふまえて考察されることがなかった。

3. 上記の理由により、「かれゆくやうにて」という、大君の死の表現は、植物が枯れるという意味においてしか検討されず、それが物語の展開にもたらす意義が十分に明らかにされなかった。

本稿は、まず1.について、『源氏物語』内および比喩表現史における死の表現から、その特異性を検証し、2.について、当該場面全体の文脈から、大君の死に関わる「虫の殻」などの、他の比喩表現との関連性を見たうえで、従来の「かれゆくやう」な死のとらえ方に対して、新たな説を提示する。そして、それに基づき、3.について、大君の死と後続する物語の展開との密接な関係を追究する。

1.『源氏物語』の死の表現

まずは『源氏物語』内の死の表現に目を向けたい。

『源氏物語』では、約50人の人物の死が記されている。それらの死は、例えば「太政大臣亡せたまひぬ」(明石・③P252)や「この春亡せたまひぬる式部卿宮の御むすめを」(蜻蛉・⑥P263)などのように、死の事実報告がなされるだけのことが多く、「「やや」とおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり」(夕顔・①P167)のように、臨終の経過が描写されるのは7例(夕顔、葵上、藤壺、柏木、一条御息所、紫の上、宇治大君)にすぎない。

その中でも、死にゆくさまを表すのに直喩表現が用いられるのは、大君以外では次の3例のみである。

〔1〕(藤壺入道は)灯火などの消え入るやうにてはてたまひぬれば、いふかひなく悲しきことを思し嘆く。(薄雲・②P447)

〔2〕(柏木は)女宮にも、つひにえ対面しきこえたまはで、泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ。(柏木・④P318)

〔3〕(紫の上は)まことに消えゆく露の心地して限りに見えたまへば、(略)明けはつるほどに消えはてたまひぬ。(御法・④P506)

このうち、〔1〕の「灯火などの消え入るやうにて」という表現は、生命力が衰退・消滅していくさまを表す抽象的な比喩であり、また、釈迦入滅のイメージをふまえているという指摘もある[2)]。〔2〕の「泡の消え入るやうにて」と〔3〕の「消えゆく露の心地して」は、「露」も「泡」もはかなさの象徴であることから、死を前にした生のはかなさを示す直喩表現である。これらは歌語的表現であり[3)]、後述するように、死にゆく様子を形容する慣用的な表現である。

これらに対して、大君の死の場合、冒頭引用文の最初の一文は薫と語り手の思いが重なった表現になっており、また当該表現の直前に「見るままに」とあることから、「かれゆくやうにて」は大君の死にゆく様子を、薫の目が写しとった表現と考えられる[4)]。

そもそも、死にゆくさまが看取られるという設定自体、『源氏物語』には他にほとんど見られない特殊なものなのであり、しかもこの大君の臨終場面の表現がリアルな描写として捉えられることは、『源氏物語』において、極めて重要な意味

を持つといえる。その点、「かれゆくやう」な死を植物に擬えたものとし、その様相のイメージを大君の死と重ねようとする、従来の、象徴的・観念的な比喩の理解では、大君の死の表現のもつ意義を正当に理解したことにならないだろう。

2. 比喩表現史に見る死の表現

多門（1999）の、上代から近世までの文学作品における、主に直喩表現として取り上げられた全3606例のうち、死を表現しているとみなされるのは67例（全体の約1.8％）にすぎず、まずこのことから、いかに死の比喩表現が少ないかがわかる。

それらのうち、以下の〔4〕〔5〕のように、「あわ」「つゆ」などの〈水〉に関するものが39例（うち、直喩は11例）で、約60％と最も多い。

〔4〕つゆも湯などやうのものをだに見も入れ給はず、思ひ沈むに、水の沫などのやうに消え入りぬべきを、（『浜松中納言物語』P405）

〔5〕「まづ先にとは急がれはべれど、いかなるにか、名のみ「露にあらそふ」さまにていままでながらへはべるも、（『狭衣物語』①P214）

これらは、はかない命を表すときに用いられる比喩で、「露の命」（14例）、「露の身」（9例）といった隠喩表現として多く見られる。

ほかに、

〔6〕この、あらむ命は、葉の薄きがごとし」（『源氏物語』手習・⑥P348）

〔7〕一家にいみじきことに思しみだりしほどに、その移りつる方も夢のごとくにてうせたまひにしかば、（『大鏡』P261）

〔8〕一天クレテ、月日ノ光ヲウシナヘルガ如シ、万民嘆キ、父母ノ別ニアヘルガ如シ。（『保元物語』上P9／新日本古典文学大系）

などのように、植物や夢によってはかない命を比喩したり、月日の状態で、天子の死を観念的に比喩したりする例なども見られる。

しかし、死にゆくさま自体を描写した例はほぼ皆無であり[5]、そのさまを「かれゆく」で表現した例も、当該大君の例以外には一例も見られない。つまり、「かれゆくやうにて」という大君の死の表現は、比喩表現史的に見ても非常に特異な例といえるのである。

紫の上や柏木に見られるような「露」や「泡」による死の比喩表現は他の作品にも多く見られるのに対して、「かれゆくやうにて」は受け継がれることがなかった。それは、この表現が大君の死にしかそぐわない、特異なものだったからではないかと考えられる。

3.「かれゆく」の意味用法

それでは、「かれゆくやう」な死とは、どのような様子を表すのだろうか。

まずは、「かれゆく」という語の用例を検討すると、和歌において、『紫式部集』のころまでに23例（うち詞書2例）見出される。それらの「かれゆく」の主体としては、人（心を含む）（5例）、草（思草を含む）・野辺（各4例）、言の葉（3例）、男・木（各2例）、馬・小野の浅茅、白菊・田・畑・花（各1例）、があり、全体としては、植物関係が中心であることが確認される。そして、それらは

〔9〕時すぎてかれゆくをののあさぢには今は思ひぞたえずもえける（『古今和歌集』15－790）

〔10〕世の中を何にたとへん草も木も枯れゆくころの野べのむしのね（『順集』127）

〔11〕はなすすき葉わけのつゆやなににかくかれゆく野べにきえとまるらむ（『紫式部集』96）

などのように、植物が生気を失っていく様子をあらわすのに用いられ、その情景のもの悲しさ、あはれさが、詠者の心情と呼応する。

このことに基づき、従来、大君の死の表現「かれゆく」も、植物のイメージで捉えられてきたのであろうし、引用した『新全集』のように、「枯」の漢字があてられてきたのであろう[6]。

しかし、枯れてゆく植物は、その前と後とでは、姿形が大きく変わってしまう。木々ならば葉や枝が落ち、草花なら萎れ散り、地に伏し、やがて土と化す。その様子こそが、まさにもの悲しさやあわれさを喚起させるのであるが、このような姿形の変化をともなう植物の「かれゆく」では、その死の直後に「変はりたまへるところもなく」と語られる大君の様子にはそぐわないのである。

いっぽう、植物以外に対して用いられる「かれゆく」を見てみると、

〔12〕ちよをへしまつは二葉もかはらぬにかれゆく人のこころなになり（『順集』116）

〔13〕（詞書）をんな、かれゆくをとこをうらみて、こと人かたらふとききて（『実方集』154）

〔14〕君が手をかれゆく秋のすゑにしものがひにはなつむまぞかなしき（『後撰和歌集』19－1312、返し）

などのように、人の心〔12〕、男〔13〕、馬〔14〕が、詠み手から離れていくことを詠んだものであり、これらの「かれゆく」は「離る」と「ゆく」の複合語「離れゆく」である（〔12〕については、「枯れゆく」も重ね合わされている）。このように、「かれゆく」は、心理的に、あるいは物理的に、離れてゆくこともあらわすのである。

ところで、大君の死の表現に用いられた「かれゆく」の主体は「もの」である。具体的な植物名でもなければ、それ以外の個別の存在を示すことばでもない。その「もの」とは何であり、それが「かれゆく」とはどういう変化を意味するのか。このことを明らかにするために、当該場面の前後の、死に関わる表現を見ておきたい。

4.「中に身もなき雛」

本論冒頭に引用した部分の前半は、次のように描かれていた。

〔15〕腕などもいと細うなりて、影のやうに弱げなるものから、色あひも変らず、白ううつくしげになよなよとして、白き御衣どものなよびかなるに、衾を押しやりて、中に身もなき雛を臥せたらむ心地して、（略）いかになりたまひなむとするぞと、あるべきものにもあらざめりと見るが、惜しきことたぐひなし。（総角・⑤P326）

下線部の「中に身もなき雛」とは、頭と衣装だけの姿形を指している。大君の体が痩せ細っているため、まるで肉体を包んでいない衣装だけの姿のように見える

というのである。

ところで「雛」は、『源氏物語』に18例見られるが、大君の例以外は、いずれも若紫や雲居雁、明石姫君などの遊び道具や、幼さの比喩として登場している。たとえば、

〔16〕いつしか、雛をしすゑて、（略）また小さき屋ども作り集めて奉りたまへるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。（略）雛の中の源氏の君つくろひ立てて、内裏に参らせなどしたまふ。（紅葉賀・①P320-321）

のように、若紫（紫の上）が、雛人形でミニチュア世界を作って遊んでいる場面などに見られる。

ここでは、雛人形は、人間の身代わりであって、その人形は、外形は人間に似ているが、魂は入っていないという点をおさえておきたい。この「雛」にたとえられた大君は、生きているうちに「雛」という、すでに魂のない、人の外形をしたものとみなされているのであり、これは〔15〕の波線部の表現にも通じている。

5.「虫の殻」

同じく後半には、大君の死後、次のような表現が続いている。

〔17〕中納言の君は、さりとも、いとかかることあらじ、夢かと思して、御殿油を近うかかげて見たてまつりたまふに、隠したまふ顔も、ただ寝たまへるやうにて、変りたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを、かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかばと思ひまどはる。（総角・⑤P329）

〔18〕「中納言殿の、骸をだにとどめて見たてまつるものならましかばと、朝夕に恋ひきこえたまふめるに。同じくは、見えたてまつりたまふ御宿世ならざりけむよ」と、見たてまつる人々は口惜しがる。（早蕨・⑤P347）

〔17〕の「虫の殻」は、古注釈以来、「蛻也・虫のもむ（ぬ）けたるをいふ也」（『花鳥余情』93項）、「蛻せみのもぬけたるからの事」（『万水一露』715項）と説明され、中身のなくなった蝉の抜け殻のことと解釈されてきた。

この「虫の殻」という表現は、大君のほか、もう一例、蘇生した後の紫の上の様子をあらわすのにも使用されている。

〔19〕（洗髪後の髪を広げて横になっている紫の上の顔色は）青み衰へたまへるしも、色は真青に白くうつくしげに、透きたるやうに見ゆる御膚つきなど、世になくらうたげなり。もぬけたる虫の殻などのやうに、まだいとただよはしげにおはす。（若菜下・④P244）

「もぬけたる虫の殻」とは自分で自分の体を支えていられないほど衰弱した紫の上の状態を比喩しているのだが、中身の無い蝉の抜け殻と対比される紫の上の「中身」とは、生命を支える魂であろう。紫の上は蘇生後も、まるで魂の宿っていない外形だけのものであるかのようにみられているのである。

紫の上と大君の、死に至るまでの描写が酷似していることは既に伊藤（1987）に詳しいのでここでは述べない。だが、大君の「虫の殻」は、紫の上の場合と同じように、「うつくしげ」に横たわり、魂を失っている様が「虫の殻」という表現で

捉えられているのである。

なお、この殻が、「虫の殻」であって、蝉の抜け殻をあらわす「空蝉」ではないのは、それが帚木・空蝉巻の女主人公となった「空蝉」という女のイメージを強く負っている言葉であり、それとの差異化を図るためと考えられる。

さらに後続する〔18〕で大君の亡骸を意味している「骸（から）」は、以下の例からも明らかなように、〔17〕の「虫の殻」に通じている。

〔20〕空蝉のからは木ごとにとどむれどたまのゆくへを見ぬぞかなしき（『古今和歌集』10－448、物名、からはぎ、よみ人しらず）

〔21〕空蝉はからを見つつもなぐさめつ深草の山煙だにたて（『古今和歌集』16－831、哀傷歌、ほりかはのおほきおほいまうち君まかりける時に、深草の山におさめてけるのちによみける、僧都勝延）

〔20〕では、魂を失った人間の「から（骸）」が中身を失った「空蝉のから（殻）」と重ねあわされており、〔21〕では「空蝉のから（殻）」と、火葬されて消えていく人間の「から（骸）」とが対になっている。

6.「中に身もなき雛」と「虫の殻」

大君の死の前後に用いられた「中に身もなき雛」と「虫の殻」という比喩相互を関係付けるものとして、衣装の中に、それをまとうべき体がないという状態と、蝉の抜け殻の状態を結び付ける、以下のような例をあげることができる。

〔22〕空蝉の身をかへてける木のもとになを人がらのなつかしきかな／と書きたまへるを懐に引き入れて持たり。（略）かの薄衣は小袿のいとなつかしき人香に染めるを、身近く馴らして見ゐたまへり。（『源氏物語』空蝉・①P129-130）

〔23〕いまはとてこずゑにかゝる空蝉のからをみんとはおもはざりしを（『後撰和歌集』12－803、恋四、つらくなりにけるおとこのもとに、いまはとてさうぞくなど、返しつかはすとて、平ながきがむすめ）

〔22〕では、脱皮した蝉の抜け殻が、空蝉という女が残した薄衣の比喩となっており、〔23〕では、着る人間がいない装束を「空蝉のから」に比喩している。両例とも、身を包んでいない着物と蝉の抜け殻とを重ねて、「中身のないもの」を表現しているのである。

以上から考えるならば、大君の外形を表現する「中に身もなき雛」と「虫の殻」そして「骸」は、その死をはさみながらも、「中身のないもの」という意味を共有し、その「中身」は、外形に対する中身、その核心たる「魂」に繋がっているのである。

これらを踏まえれば、大君の「かれゆくやうにて」という死の表現も、その一連の比喩表現と通底しているものとしてとらえざるをえないだろう。

7.「かれゆくやう」な死とは

このことを考えるにあたり、たとえば『伊勢物語』の次の場面に注目したい。

〔24〕むかし、男、みそかに通ふ女ありけり。それがもとより、「今宵夢になむ見えたまひつる」といへりければ、男、／思ひあまりいでにし魂のあるならむ夜ぶかく見えば魂結びせよ。（『伊勢物語』第百十段P208）

下線部からは、寝ているあいだ、魂は体から抜け出ていくものと考えられていたことがうかがえる。また『源氏物語』でも、六条御息所が

〔25〕すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君と思しき人のいときよらにてある所にいきて、とかく引きまさぐり、(略) うちかなぐるなど見えたまふこと度重なりにけり。(葵・②p36)

とあり、夢を見ているときに御息所の魂が物の怪となって葵の上を苦しめていることを暗示させる場面がある。

さらに、修法によって蘇生した葵の上や紫の上[7]においても、魂とは身体から出入りするものであり、死んだ直後の人間と寝ている人間とはすぐには見分けられないさまが描かれている。大君の「ただ寝たまへるやう」という表現も、まさにそのような、魂が抜け出ている状態をあらわしていると見ることができる。

同様にして、臨終の過程として表現された「かれゆくやうにて」の主体が、他ならぬ「もの」という言葉によって示されたのは、その関連においてこそであると考えられる。

「もの」は、「なんらかの形をそなえた物体一般」を意味すると同時に、「対象をあからさまにいうことをはばかって抽象化していう」(『日本国語大辞典　第二版』) ときにも使われ、後者は神仏、妖怪、怨霊など、恐怖・畏怖の対象のことを指す[8]。

大君の死にゆくさまをあらわす「もののかれゆくようにて」の「もの」とは、まさにそのようものをあらわすのであり、それが体から離れてゆくような様として描かれている。

もとより、魂そのものは目に見えないものであるから、あくまでも比喩なのであるが、見るかぎりでは生前と何ら変わることの無い外形の大君だからこそ、その死はそのようにしかとらえられなかったのであり、それは「身もなき雛」・「虫の殻」・「骸」に共通する「中身のないもの」というイメージに連なっているのである。

このように、死の過程を一連の比喩で描くこと、それを「中身のないもの」になってゆくさまという一貫したイメージでとらえることは、大君の臨終場面以外には見られない、極めて特異な例である。

8. 物語における意味

さて、大君の死の表現は、単にその場面描写の特異性としてだけではなく、その後の物語、とりわけ薫の愛執の物語という特異性を導くものでもある。

大君の死後に述懐される、「虫の殻のやうにても見るわざならましかば」〔17〕や、「骸をだにとどめて見たてまつるものならましかば」〔18〕は、せめて大君の体だけでもそこに存在してほしいという、大君の外形に対する薫の強い執着を示していると考えられる。

このことは、「かれゆくやうにて」という表現の前後に、「世の中をことさらに厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにもののかれゆくやうにて、消えはてたまひぬるはいみじきわざかな」と、「いみじ」という程度のはなはだしさを表す形容詞が反復されていることと関係して、重要な意味を持ってい

る。

薫の「いみじきもの」という思いの原因は、直面する大君との死別であり[9]、「いみじきわざかな」は大君の死んでいく様子に対しての嘆息であろう。この「いみじ」は、これ以前に描かれた「すこしうきさまをだに見せたまはばなむ、思ひさますふしにもせむ、とまもれど、いよいよあはれげにあたらしく、をかしき御ありさまのみ見ゆ。（総角・⑤P326）」という場面とも繋がっている。

薫は、死にゆく大君の「うきさま」、つまり醜いところを見出して想いを醒ましたいと思うのであるが、病床の大君はそれに反して「いよいよあはれげにあたらしく、をかしき御ありさま」であり、臨終後でさえも「うつくしげ」なのである。それを目にした薫は大君が死んでもなお、せめてその外形だけは存していてほしいと執着してしまう。

「いみじ」と表現される薫の苦しみは、このように、大君の死が「もののかれゆくやう」な、「うつくしげ」な姿を残すものであったことに起因するのであり、それにたいする執着は、とりもなおさず、物心ついたときから持ち続ける薫の道心[10]との矛盾を決定づける。

その後、愛執と道心のあいだをたゆたいながら、薫は大君への執着を消せぬまま、やがて、大君の外形に似た中の君や浮舟、すなわち、大君の形代との恋物語が展開されることになる。

おわりに

本稿では、大君の死の表現について、従来の植物イメージによる解釈を見直すために、以下のことを明らかにした。

①人が死にゆく様を描写すること自体が少ない『源氏物語』のなかにあって、極めて少ない直喩表現のひとつであること

②その直喩表現のなかでも、大君の例だけが、作中人物の目によって、その死にゆく様子を描写したものであると捉えられること

③『源氏物語』において、同一の死に対して直喩表現での描写が連続的に用いられている例はほかの場面には見られないこと

④広く古典文学の比喩表現史としてみても、死の比喩表現としての「かれゆく」という用例は、大君の例のほか見当たらないこと

⑤その「かれゆく」は、従来のように植物が枯れるという意味ではなく、魂が抜けていき、生前の姿を残しながら死んでいくという意味で用いられていること

以上のように、大君の死にゆくさまを表現した「かれゆくやうにて」という直喩が、『源氏物語』においても比喩表現史においても、非常に特異であることが明らかとなった[11]。『源氏物語』以後の作品にも引き継がれることのなかった、この表現は、『源氏物語』作者ならではの表現と考えることができる。

また、従来の植物説を否定することで、「もののかれゆくやうにて」という特異な死の表現が、前後に配された比喩表現と密接に絡み合い、死にゆく大君に対し、「中身のないもの」というイメージを作り上げていることをつきとめた。それは大君の外形にこだわる表現であり、単に大君というひとりの女の死を描くだけで

はなく、その外形を求める薫の、矛盾する道心と愛執をくっきりと浮き彫りにするものともなった。

そして、それはのちに大君の形代を求めていく行動の布石となる。すなわち、「かれゆくやうにて」を中心とした、大君の死の表現の特異性は、宇治十帖という物語の特異な展開を方向付けるものとしてもきわめて重要な意味をもつのである。

注

1)「ものの枯れゆく」という本文は、青表紙本系大島本、河内本系諸本、横山本では、「もの（の）かくれゆく」とある。この本文については諸説あるが、『源氏物語』では、「かくれゆく」の用例が他に見えないことなどから、今回はこの本文を採用しなかった。

2) 石田（1961）に、『法華経』安楽行品にある釈迦入滅の記事「後当入涅槃如煙尽灯滅」がその典拠とある。

3)〔2〕については湯本（1993）が恋死を意味する表現であると指摘しており、〔3〕は、直前に明石中宮、光源氏、紫の上の三者による唱和歌において、儚い命が露の比喩として詠み込まれている。

4)〔3〕も作中人物が人の臨終を看取っているという点は共通しているが、紫の上の臨終の様子が周囲の状況と並列して語られ、また整然とした敬語表現が使われていることから、冷静な語り手の目による場面描写であるととらえることができる。

5) 用例のなかのひとつ、「二人の尼、（略）聖衆来迎し給ひて、ねむるがごとく、往生の素懐をとげにけり」（『曽我物語』）における波線部の直喩は、大君の死の表現に近似していると思われるが、これは法然によって教学の根幹とされた『仏説観無量寿経疏』の「視死如眠。夫人見王無憂。観法成果也」に典拠を持つと考えられる。

6)『新全集』のほか、『日本古典全書』『新潮日本古典集成』も「枯」を当てる。玉上琢彌『源氏物語評釈』では大島本本文を取りつつ、より相応しい本文として「物ゝかれゆく」を紹介し、「草木の枯れゆくやうにてはなやかでなく姫宮は消えうせたのだ」とする。

7) 葵の上が、「御物の怪のたびたび取り入れたてまつりしを思して、御枕などもさながら二三日見たてまつりたまへど（葵・②P46）」と、死後も生き返るものとして寝かせられ、紫の上が、臨終場面で「さきざきもかくて生き出でたまふをりにならひたまひて（御法・④P506）」と、若菜下巻で一度蘇生したことを思い出されたように、「死」と、寝ている状態の境界は曖昧である。

8) たとえば「大殿には、御物（もの）の怪いたう起こりていみじうわづらひたまふ。この御生霊（いきすだま）、故父大臣の御霊（おんらう）など言ふものありと聞きたまふにつけて」（葵・②P29）とあるように、「魂（たま）」や「霊（らう）」を「物の怪」に含めており、したがって「もの」は目に見えない何かを総称することが可能と考える。

9) これ以前に、「いとどなよなよとあえかにて臥したまへるを、むなしく見なして、いかなる心地せむと、胸ひしげておぼゆ」（総角・⑤P319）とあった。

10) 薫の道心は、物語当初より、「世の中

を深くあじきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむなど思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはんはつつましくなど思ひ棄てたまふ」(匂宮・⑤P29)と語られた。

11)死にゆく身体が「かれゆく」を用いて描写された直喩表現は、日本の古典文学に類を見ないばかりか、森(1987)によれば、仏典からの引用の可能性も見出されず、また『源氏物語』作者が見ることのできたとおぼしい漢籍(『詩経』『文選』『玉台新詠』『白氏文集』など)にも典拠らしきものは見られない。

参考文献

伊井春樹ほか編(1978～2000)『源氏物語古注集成』1～30 桜楓社

石田穣二(1961)「源氏物語の四つの死―歌語のことなど」『学苑』262

石田穣二(1968)「大い君の死について」『学苑』337

伊藤博(1987)「死なぬ薬・死ぬる薬～竹取と源氏～」『国語と国文学』64-3

咲本英恵(2011)「宇治十帖大君考」『文學藝術』34

鈴木早苗(2010)「「枯れゆく」宇治の大君―『源氏物語』総角巻の求婚拒否と『白氏文集』「婦人苦」」『文学・語学』196

高橋 亨(1987)『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会

多門靖容(1999)『古典比喩用例集』私家版

中村紳一(1980)「源氏物語における死―表現論的アプローチ―」『中古文学論攷』1

西下経一(1941)『平安朝文学』塙書房

三谷栄一(1965)『物語文学史論　新訂版』有精堂

三谷邦明(1989)『物語文学の方法Ⅰ』有精堂

森 章司編(1987)『仏教比喩例話辞典』三秀舎

湯本なぎさ(1993)「「ものの枯れてゆくやうに」(『源氏物語』の心象ノート)」王朝物語研究会編『論集源氏物語とその前後4』新典社

付記

本稿は、第119回表現学会東京例会(平成23年11月5日(土)、共立女子大学)における研究発表に加筆修正したものです。執筆にあたって、発表時さらに査読後にいただいたご意見が大変参考になりました。篤く御礼申し上げます。

(共立女子大学)